Osaka University Knowledge Archive

Title	ベラスケス (1)
Author(s)	森本, 久夫
Citation	Estudios Hispánicos. 1981, 7, p. 115-123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97893
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ベラスケス（1）

森　本　久　夫

1

ベラスケスの作品にはじめて関心をもったのは次のようなウナムノの詩の一節だった。

わがキリストよ，死して，あなたは何を考えられるのか。
ナザレ人のあなたの豊かな黒髪の
閉ざされたそのベールが
なぜ，あなたの額の上に下りるのか。
あなたは，あなたの中を見られる，
そこに神の国がある。あなたの中，そこでは
生ける霊魂の永遠の太陽がのぼる。
あなたの身体は白い。
光の父，生ける太陽の鏡のように，
あなたの身体は白い
死して，その母なる倦み疲れさまよう
わが地球をめぐる月のように；
ナザレ人の
あなたの豊かな黒髪の
ベールのような夜の空の
おごそかな夜の空の
聖体のようにあなたの身体は白い。(1)

この詩は私にとって魅力があった。黒と白の対象，暗闇と光明の対象として絵画的な詩として興味をそそられた。キリストは世の闇を輝らす太陽である。しかし，十字架につけられた人としてのキリストの身体は白い，

月のように白い。円くて白い聖体と月を重ね合わせてみると死せるキリストは月のように白く，聖体そのものである。額の上に黒髪がたれ，その下にキリストの顔がある。キリストはなにかを考えておられる。自分自身の内部をじっと見つづけておられるのだろうか。聖ルカが言う「神の国」(2)を見ておられるのか。この詩の一節を口ずさんでいるうちに私の中に一つの十字架上のキリスト像がつくられていった。人のために十字架にかけられて死んでいった人，キリストと呼ばれた人はきっとこの詩のイメージの通りだったにちがいない。そう思うようになった。その証拠にゴヤの「十字架上のキリスト」を見たとき，いやこれではない，と思えて仕方なかった。そこには上方を仰ぐ若者としてのキリストがあった。その赤味のかった唇に抵抗を感じない訳にはいかなかった。

1969年の秋，マドリーのプラド美術館のベラスケスの「十字架のキリスト」の前にたったとき，これがウナムノの詩にうたわれたものなんだ，私はついにその実物の前に立つことができたという感激に浸ったが，今もそれを忘れることができない。“Cristo crucificado”と題されたこの作品は十字架にはりつけられたキリストを描いたものである。キリストは両手をひろげ，それぞれ十字架の枝に釘づけられ，釘の頭を握りしめるようにして閉じられた手のひらから血がしたたっている。向かって左に傾けてうつむいた頭部には茨の冠がかぶさり，顔の半分は額の上からたれ下がった髪におおわれて見えない。髪は黒い。身にまとっているものは下腹にまかれた白い布だけである。右の胸のすぐ下に槍傷がある。そこからわずかに血が流れたあとが残っている。両足は並べて台の上におかれ，それぞれ釘が打ちこまれ,その釘の頭の許から流れ出た血は足の甲をつたい，指の間を通り，十字架の柱をつたい落ちている。キリストの眼は閉じられている。私たちを見つめることはもうないのだろうか。この表情は内部の父なる神の国を考えているものだ。じっとその表情を見つめていると，キリストはもう私たちの許から立ち去ってしまわれた。それも私たちが原因なんだ，そんな思いになってくる。

この作品は1630年ごろ制作された。ベネディクト派女子修道会のサン・プラシド修道院のために描かれた。そのため「サン・プラシドのキリスト」とも呼ばれている。

この作品の特徴として指摘されるのは，両手，両足に打ち込まれた4本

の釘で，これは中世のロマネスク時代にもどった表現である。13世紀以後は苦悩の表現を強めるために3本釘，つまり両足を重ねて1本の釘を打ち込む描き方がされてきたが，ベラスケスの師パチェコがロマネスク様式の図像を復活，ベラスケスはそれにならったとされている。また頭部を一方に傾けることによって左右対称の動きのなさを破り，全体としてより自然な姿に表現したといえる。そこからかもし出されるキリストは宗教的崇高さと深い静けさをたたえているといえるのではないだろうか。

チリの女流詩人ガブリエラ・ミストラールがロダンの彫刻「考える人」に想をえて詩作しているが，ウナムノはこのベラスケスの作品によって詩作した。

2

ベラスケスとはどんな画家だったのか，私なりに理解しようとしている。その手始めに彼の生涯を辿ってみたい。

1599年6月6日，セビーリャのモレリーア地区のサン・ペドロ・アポストル教会でベラスケスは洗礼をうけた。したがってそのすぐ前にゴルゴハ通りの家で生まれたにちがいない。父はフワン・ロドリゲス・デ・シルバといい，母はヘロニマ・ベラスケス・イ・ブェンロストロといった。ディエゴと命名されたベラスケスの名は正式にはディエゴ・デ・シルバ・ベラスケス Diego de Silva Velázquez となる。しかし，ふつう母方の姓ベラスケスで通っている。父方の祖父はポルトガルからセビーリャに移り住んだ人，母方の家系は元々イスパニアの貴族であったとか，そのために母方の姓で呼ばれるようになったのかも知れない。父方の家系はポルトガルの貴族の出であったといわれている。

学校にあがったディエゴはラテン語，文学，哲学などを学んだが，すぐ絵画に熱中するようになったという。彼の学習用ノートはスケッチブックに使われるようになった。

そこで11才のときエレラ・エル・ビエホという画家のところに入門，絵画を学んだが，この師はけんか早い粗暴な性格の人で，妻子にも逃げられる有様だった。そこで1610年末フランシスコ・パチェコのアトリエに移っ

た。パチェコは師としてはすぐれていたという。ベラスケスは師から絵を学ぶだけでなく，師の許に集まる文化人たちとの接触からも学んだ。1617年ベラスケスは師パチェコとフワン・デ・ウセダによる試験に合格し，サン・ルカス画家同業組合のメンバーの資格を得て，職業画家になった。パチェコの許で学んだとき一緒にいたのがアロンソ・カーノであり，当時セビーリャで知り合って友人となった人にフランシスコ・デ・スルバランがいる。

1618年4月23日，師の娘フワナ・デ・ミランダと結婚したが，ベラスケスは19才，フワナは16才にもなっていなかった。彼らの結婚生活についてはほとんど知られていない。翌1619年長女出産，義父で師のフランシスコ・パチェコの名をとり，フランシスカと命名された。1621年には次女イグナシアが誕生したが，幼くして死亡したため，のちにはベラスケスの子はフランシスカひとりと記述されるようになった。

1621年フェリペ4世が王位についたが，彼の側近にはオリバーレス伯や詩人フランシスコ・デ・リオハ，聖職者フワン・デ・フォンセカ・イ・フィゲロアなどセビーリャにゆかりのある人が多かった。そこで1622年パチェコに励まされてベラスケスは首都に出かける決心をした。王の肖像を描くチャンスを手にすることが目的であった。しかしこの時は目的が達せられず，詩人ルイス・デ・ゴンゴラの肖像だけ描いて帰郷した。

翌1623年，オリバーレス伯の招きで，今度は師パチェコ，奴隷で弟子であったフワン・デ・パレハと一緒にふたたび首都に出た。そして8月30日フェリペ4世の肖像を完成した。オリバーレス伯は以後ベラスケスだけが王の肖像を描くようにすると約束した。10月初旬ベラスケスは正式に宮廷画家になった。王はベラスケスが描いた馬上の自分の肖像が大変気に入り，マヨール通りのサン・フェリペ教会の向かい側にかかげさせた。そのため市民はそれを見ようとして列をなしたという。この王はあまり政治に力を入れなかったが，狩猟・演劇・美術に関心があり，自身劇を書き，絵筆も握ったという。また鑑賞眼のある人でベラスケスにとってよき保護者であった。

ベラスケスが宮廷画家になって仕事をはじめた頃，すでに宮廷画家としてバルトロメ・ゴンサレス，ビセンテ・カルドゥチョ，エウヘニオ・カヘスらの宮廷画家がいたが，彼らにとってベラスケスの出現は単なるライバ

ルの登場どころか自分たちの地位をおびやかすものであった。とくにあとの2人はイタリア人でマニエリストを自認し，ベラスケスの作品はミケランジェロやラファエロやその他のマニエリストたちの伝統に反するものであるとして批難した。王はそれらの批難・中傷を解消すべく画家たちに同一テーマの作品を描かせた。テーマは「モリスコの追放」であったが，このコンクールで勝つことによってベラスケスは自他ともに認める最高の画家の地位を確保した。

この時期の作品に「オリバーレス伯公」el Conde-Duque de Olivares や「ドン・カルロス王子」Infante Don Carlos などがある。

1628年夏，ネーデルラントから大使としてルーベンスがイスパニアにきて，フェリペ4世にあちらで起こっている戦争の報告をした。彼はそれより25年前のフェリペ3世時代にもイスパニアに来たことがあり，当時バリャドリーでイスパニアの画家たちに手伝ってもらっていくつかの作品を仕上げた。ふたたびやってきたルーベンスはすでに51歳になっており，ヨーロッパ中にその名を知られた画家であった。イスパニアの画家たちを見下していたという。しかし，フェリペ4世はまだ30歳にもならないベラスケスをそのルーベンスの滞在中のお供につけた。年令も趣味もちがう2人だったが親しくなった。2人一緒にエル・エスコリアルに行き，王所有の美術品をすべて見学した。ルーベンスは8ヵ月のイスパニア滞在を利用して絵筆をとった。それを見学するベラスケスはいろんなことを学んだにちがいない。しかし，すでに自分独自のスタイルをもっていたベラスケスはそれを見失うことがなかったという。しかし，この期のベラスケスの代表作である「バッカスの勝利（酔いしれる人々）」Triunfo de Baco（Los borrachos）はルーベンスの影響で生まれたといわれている。またルーベンスはベラスケスに外国旅行をすすめたという。外国へ行って偉大な画家たちの作品を見なければいけないとすすめたという。

3

1629年8月10日バルセローナを出航した船でベラスケスはイタリアに向かった。同行した人にアンブロシオ・デ・スピノラがいた。後年ベラスケスは「ブレダの開城（槍）」La rendición de Breda（Las lanzas）を

描いたとき，画面の中央にこのスピノラをおいた。1630年末ベラスケスはそれまでいたローマを去ったが，すぐイスパニアには帰らず，フェリペ4世の命令でナポリに出かけ，そこで王女マリアの肖像を描いた。このナポリには早くからホセ・リベラがいて王宮の中で副王のため活動していた。その彼を訪ねている。

1631年1月帰国，1629年に生まれた王夫妻にとってはじめての男子であるバルタサール・カルロスの肖像を描いた。翌1632年秋にはフェリペ4世，妃イサベルの肖像を描いた。この頃の作品で，ベラスケスの作品として特異なものに「巫女」Silbia という女性の半身像がある。女性の横顔をベラスケスが描いた唯一の作品である。モデルは妻のフワナともいわれるが定かではない。

ベラスケスにつねに従ってきた弟子にフワン・デ・パレハとフワン・バウティスタ・デル・マソがいるが，1634年マソはベラスケスの娘フランシスカと結婚した。この年かつてセビーリャで共に学んだアロンソ・カーノがマドリーに出てきて2人は再会した。

1636年ベラスケスは王室衣裳係に任じられた。

この第1回イタリア旅行後の時代を画家ベラスケスの第2期といわれているが,「ブレダの開城」のような歴史画,「ドン・フワン・デ・アウストゥリア」Don Juan de Austria,「エル・プリモ」El Primo のよう道化役者たちの肖像,「十字架のキリスト」や「聖母マリアの戴冠」La Coronación de la Virgen のような宗教画を描いた。

4

1650年1月24日イタリアへ向けてベラスケスはマラガから船出した。この2回目のイタリア旅行は途中嵐にあう危険な旅であった。フェリペ4世の2度目の結婚相手マリアナ・デ・アウストゥリアを迎えに行くナヘラ公と同行した。ジェノバに到着したとき,ベラスケスとフワン・デ・パレハは一行と別れミラノに行き，レオナルド・ダ・ビンチの「最後の晩餐」を鑑賞した。パドゥア経由でベネチアに行き，そこで絵画の買付を行なった。それはこの旅が美術品購入の使命を帯びたものだったためである。そのあと，ボローニャ，フィレンツェ，パルマ，ローマと経過し，ナポリに到着，王

からオニャテ伯に宛てられた文書と金銭を手渡した。またここで友人リベラを訪ねた。

ナポリからローマへ戻ったベラスケスは旅の目的を忘れたかの如く，絵画に夢中になった。当時ローマ教皇は74歳になっており，気むずかしい人であったが，ついにベラスケスは彼の肖像を描くことに成功した。それが彼の「イノケンチウス10世」Inocencio X という作品である。またこの時期の作品にベラスケスの描いた裸体画として有名な「鏡を見るビーナス」La Venus del espejo がある。

教皇の肖像を描くことに成功したあと，多くの人がベラスケスに肖像を描いてもらおうとした。ベラスケスにとってローマ滞在は楽しかった。記念物を見学し，美術品を鑑賞してまわった。王から命じられた美術品買付もすましたが，帰国する気にならなかった。幾度となく王から命令がきたがなかなか応じなかった。1651年になってやっと帰国した。

5

二度目のイタリア旅行から帰国した翌年の1652年彼は王室配室長に任じられた。その任務は王宮内の燃料室の管理，掃除人の采配からはじまり，美術品の保存，宴会などの行事での席次の決定，旅の準備までやらなければならなかった。この任務はベラスケスから多くの時間を奪ったにちがいない。しかし，1656年彼の最大傑作といわれる「ラス・メニーナス」Las Meninas が生まれた。

3.18×2.76メートルの大きな画面はその前に立つとき，私たちもその絵の中，つまり王宮内の一室にいるような錯覚におちいる。事実，画面左手でカンバスの前に立ち，手にパレットと絵筆をもってベラスケスが私たちの方を見ているが，それは私たちをみているのではなく，私たちの立っているところに立っている王夫妻を見ているのだ。画面の奥の鏡に王夫妻が映っている。その鏡が絵でなく本物の鏡なら王夫妻の代わりに私たち自身がそこに映るはずである。考えてみると私たち鑑賞者が絵の中の世界に参加することになる。外部に立って傍観していることができない絵である。画面中央に立っているのは王女マルガリータと女官（メニーナ）たちである。左側の女官マリア・アグスティーナ・サルミエントは壺に入った水を

王女に差出している。右側の女官イサベル・デ・ベラスコは私たちの方をふりかえる。そのイサベルの右に女の小人マリバルボラがおり，彼女の前に寝そべっている大きな犬を彼女の隣りにいる男の小人ニコラス・デ・ペルトゥサトが踏んづけている。この人たちの背後でドーニャ・マルセラ・デ・ウリョアが騎士としゃべっており，一番奥の出入口のところにはホセ・ニエト・ベラスケスの姿がみえる。広い部屋の中へは右上方から光が射している。ホセ・ニエトの立っている戸口からも光が射し込んでいる。ベラスケスとドーニャ・マルセラと話している騎士だけが陰の中にいる。王はこの作品を自分の部屋においていたと伝えられている。また現在ベラスケスの胸にかがやく赤いサンティアゴ騎士団章の十字形は王が描き込んだのだとも伝えられる。1658年ベラスケスはサンティアゴ騎士団員に加えられた。

この時期，ベラスケスはしばしばドーニャ・マリアナ・デ・アウストゥリアや王女マルガリータや王自身の肖像を描いた。王宮の鏡の間の装飾を命じられたベラスケスは4枚の絵を描いたが，そのうち「メルクリウスとアルゴス」Mercurio y Argos だけが残存している。1657年ごろ，彼は「糸紡ぎの女たち」Las hilanderas を描いた。前景と背景と別個の情景を一つの絵の中に調和させた作品である。まだセビーリャで生活していた若い頃描いた「マルタの家のキリスト」Cristo en casa de Marta で試みたものがここで完成の域に達したといえるのではないだろうか。

1656年ベラスケスは王とともにエル・エスコリアルに出かけ，イタリアから持ち帰った絵を配置した。

イスパニアは1659年，それまで争っていたフランスとピレネー平和条約を結んだ。フランス側のマザランはいろんな条件をつけた。その結果イスパニアはロセリョン，セルダーニャ，アルトワ，ルクセンブルグ，フランドルの諸都市を失った。またフェリペ4世は娘マリア・テレサとフランス王ルイ14世の結婚を認めざるを得なかった。マドリーの王宮は結婚準備のためにあわただしい様相を呈した。配室長であったベラスケスはとくに忙しかった。婚儀の行われるフェザン島へモロ，ビリャレアル，ゴエテンスたちと出かけ準備をした。1660年6月7日無事儀式は終了した。翌8日フェザン島を出発し，同月26日マドリーに帰着したが，まもなく疲労を訴えるようになった。病床に就き，病状が悪化して回復の見込みがなくなった。

その報らせを受けた王は司教アロンソ・ペレス・デ・グスマン・エル・ブエノをベラスケスの許におくった。ベラスケスは告解し聖体を拝受した。それから7日のちの8月6日午後2時息をひきとった。享年61歳であった。肉親や友人たちは彼にサンティアゴ騎士団の服装を着け，遺体をサン・フワン・バウティスタ教会に運び，そこに葬った。それから1週間のち，彼のあとを追うようにしてフワナ・パチェコも亡くなり，夫の傍に葬られた。

時がたち，サン・フワン・バウティスタ教会は消滅，ベラスケス夫妻が現在どこに憩うのか知る人はいない。

〔註〕

(1) Unamuno : El Cristo de Velázquez, Ⅳ

(2) 聖ルカによる福音17章20節

参考文献

Joseph-Emile Muller: *Velázquez,* Thames & Hudson, London, 1976

Vladimir Kemenov: *Velazquez in Soviet Museums,* Aurora Art Publishers, Leningrad, 1977

José Antonio Maravall: *Velázquez y el espíritu de la modernidad,* Ediciones Guadarrama, Madrid, 1960

F. J. Sánchez Cantón: *Velázquez y "lo clásico",* Taurus, Madrid, 1961

Diego Angulo Iñíguez: *Resumen de historia del arte,* Distribuidor E.I.S.A., Madrid, 1966.

Ortega y Gasset: *Velázquez,* Espasa-Calpe, Madrid, 1963

Miguel de Unamuno: *El Cristo de Velázquez,* 4ª ed., Espasa-Calpe, Madrid, 1967

Arsenio Sánchez: *Velázquez, el pintor de Felipe IV,* Didier, Madrid, 1971

Valeriano Bozal: *Historia del Arte en España I,* 2ª ed., Ediciones ISTMO, Madrid, 1973.

Jonathan Brown: *Images and Ideas in Seventeenth-Century Spanish Painting,* Princeton University Press, Princeton, 1978

Antonio J. Onieva: *Nueva Guía completa del Museo del Prado.* Editorial MAYFE, Madrid, 1965

世界美術全集15　ベラスケス，集英社，1979

美術文庫21　ベラスケス，鶴書房

世界美術全集11　ベラスケス，小学館，1978

神吉敬三：プラドで見た夢，小沢書店，1980

ヴィクトール・リュシアン・タピエ著，高階秀爾・坂本　満共訳　バロック芸術（文庫クセジュ），白水社，1979

エウヘーニオ・ドールス著，神吉敬三訳　バロック論，美術出版社，1970

高階秀爾：名画を見る眼（新書），岩波書店，1969